

個人研究発表要旨

伝統とアーレント —「真珠採り」は何を企てるのか—

青木 崇（社会学研究科博士後期課程）

80年代から90年代にかけて、西洋哲学の伝統に対するアーレントの独特な態度がその思索に深く浸透するものとして注目され、またそのような態度からアーレントが読み直されるようになった。こうした動きは、『カント政治哲学講義』（政治的判断論）の公刊、ハイデガーとの関係の露呈、フェミニズムからの再評価、そのモダニティとポストモダニティをめぐる議論によって触発され、それらと連動していたが、アーレントのギリシア偏愛——それはともすればポリスの復興を主張しているようにさえ見える——に対する数々の厳しい非難への応答として大きく捉えられうる。そこでは次のような問いが立てられたと理解できるだろう。すなわち、その政治理論が単なるギリシア偏愛の近代批判でないとするれば、アーレントは西洋哲学の伝統といかに対峙したのか。

本稿の目的もこの問いを引き継ぎ、それに答えることであるが、以上のようなアーレント解釈の方向性は、いわゆるモダン／ポストモダン論争の沈静化のためか、その後の研究ではほとんど引き継がれてこなかった。しかし、伝統に対するアーレントの態度そのものは、問うべき主題であり続けているはずである。

アーレントが伝統に対する自らの態度についてまとまった仕方で論じるのはまずもって『過去と未来の間』であり、次に『暗い時代の人々』に収められたベンヤミン論である。アーレントの伝統論としてはとりわけ前者が参照すべき文献である。それによれば、キルケゴール、マルクス、ニーチェにとっては未だ転倒させつつそこから跳躍するための土台でありえた伝統は、今や権威もなく眼を惹くこともない廃墟と化している。一方で、後者においてアーレントは自らの態度を、「真珠採り(pearl-diver)」のそれとして表しつつ、ハイデガーの「解体」とベンヤミンの「歴史の天使」の間に位置づける。ただし、その位置づけに関するアーレントの記述は必ずしも明細なもの

ではないため、その細かな輪郭を描き直すことは解釈者の課題である。この点の先行研究としては、ダイナ・ヴィラによる『アレントとハイデガー：政治的なものの運命』(1996)やシェイラ・ベンハビブによる“The Reluctant Modernism of Hannah Arendt”(1996=2003)などが参考になる。以上のような見通しのもと、本発表では、伝統に対するアレントの態度が、むしろ伝統の上に立つ現在に対するものであり、また、廃墟と化した伝統を「解体」し現在を揺るがしつつも、伝統に埋もれたままの過去の断片を蒐集することで新たに思考するものであることをその現代的な意義とともに明らかにする。